

「コンブレ」の生成をめぐる画期的著書：和田章 男『プルーストの小説創造』

中野，知律
一橋大学大学院社会学研究科：教授

<https://doi.org/10.15017/26086>

出版情報：Stella. 31, pp.141-145, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



「コンブレー」の生成をめぐる画期的著書

——和田章男『プルーストの小説創造』——

中 野 知 律

プルースト研究においていわゆる生成研究が歴史的なものになりつつあると感じる人々が増えてきた今、プルーストの創作過程を究明する規範的なあり方を示す和田章男氏の著書『プルーストの小説創造——「コンブレー」の生成過程』¹⁾が刊行されたことは、きわめて意義深い出来事である。生成研究の古典とみなされるべきこの書を通して、生成研究とは何であったか、また何であり得るのか、研究／批評史におけるその意味と可能性を私たちは再検証することができるのだ。プルーストの読みは今後まさにそうした作業から新たに拓かれるはずであり、1986年の学位論文を踏まえたこの和田論考がなおも輝きを放つのはそれゆえである。

1975年春に創刊された研究誌『プルースト情報』は、当時のプルースト研究の「アクチュアルな動向」すなわち生成研究情報の「フォーラム」を任じ、日本の研究者も加わった調査が刻一刻と明らかにしていく作家の原稿の相貌を毎号伝えていた²⁾。そうした成果を受け継ぎつつ、精密な資料解析力とプルースト小説の深い読解をもってそれを体系化し修正していった和田論文なくしては、『失われた時を求めて』のプレイヤッド新版も、その後の生成研究も（校訂版はその終着点ではない）ありえなかったと言ってよい。

和田氏が博論を準備されていた時期、フランス国立図書館（BN）の「プルースト・コレクション Fonds Proust」は劇的に豊かになったのだった。1962年以降所有していた資料体に加えて、BNは1984年、蒐集家ジャック・ゲランが手放した13冊のカイエを獲得したのである。『失われた時を求めて』第1巻『スワン家の方へ』の第1部となる「コンブレー」の生成に関わる2冊のカイエがこの「カイエ・ゲラン」に含まれていたことで、和田氏の論考には大きな弾みがつくことになる。博論では「第1ゲラン」と呼ばれ、現在は「カイエ63」と

してBNに登録されているカイエが、「コンブレー」の清書カイエ3冊のうち、欠けていた「第3のカイエ」であることを確認し、それをタイプ原稿の成立解明に結びつけるところから和田論文は書き起こされている。

検討の射程は『失われた時を求めて』の誕生および揺籃期、1909年10月より1911年夏にかけてである。また『サント＝ブーヴに逆らって』と呼ばれていた小説の冒頭部の草稿が刊行をめざして清書され、タイプで起こされてから、刊行の第2の契機に臨んで、当時の構想における小説前半部「失われた時 *Le Temps perdu*」のタイプ原稿が作成されるまでの「コンブレー」の生成がみごとに描き出されていくのである。

「執筆のクロノロジーを明らかにすることが生成研究の基本である」とは著者の言だが、それを支えるのがカイエの「分類 *classement*」と「年代決定 *datation*」ということになる。BNが取得したカイエには、小説の物語のクロノロジーに照らして通し番号が振られているが、それを執筆順に並べると、カイエ3, 2, 5, 1...となることから分かるように、ブルーストは物語の展開の順序で小説を書き進めていったわけではない。物語は執筆過程で膨張し、分裂し、絡み合い、組み替えられ、時に放棄され、まったく異なる姿に変わって、今日読まれるかたちに至ったのである。カイエの表ページを通して綴られていく物語、見開き裏ページに記された加筆断章の群、余白へのさらなる加筆……。複数のカイエの執筆が同時進行することもあれば、断続的に使われたカイエや、書かれたものを編成して物語を整える「モンタージュ」ためのカイエもある。造山運動にも似たその創作実践の複雑な層理を、和田論考は「コンブレー」のタイプ原稿の検討を通して明らかにしようとするのである。その過程で、幾つものカイエの執筆年代が従来の仮説を覆して新たに確定されることになる。

*

著作の第1部は、「コンブレー」のタイプ原稿およびその加筆修正の成立時期をめぐる考察にあてられている。

1909年12月初めの書簡の中でブルーストが *cahiers* と呼んでいたものが、「コンブレー」の3冊の清書カイエを起こしたタイプ原稿 (1^{er} Cahier, 2^e Cahier, 3^e Cahier と元々記されていた3つの「紙挟み *chemises*」に収まったタイ

ブ原稿)に他ならないこと、その「コンブレー」の原-タイプ原稿にあたるものは1909年11月半ばから12月初め頃には作成されていたことが、緻密な論証によってまず確定される。従来、多くの研究者が1911年夏あるいは1910年半ば以降と考えていた成立年代の仮説が大きく修正されたことで、タイプ原稿作成時に練り直された「プチット・マドレーヌ」や「コンブレーの鐘塔」など、ブルースト小説美学を担うことになる挿話が、早い段階から物語の構造化の要として起動し始めていたことが分かるのである。

タイプ原稿上に施された自筆加筆は3段階に分類される。赤インクで書かれた加筆群は、カルネ1との照合により1910年春頃までのものであることが検証される。この「最初期の加筆群」では、テーマの構築と比喩の重層化へのブルーストの意識的な取り組みが顕著になっている。例えば、訪問客スワンとアリババのメタファーが、食卓の絵皿の像にメトニミックに結びついて、物語の「現実」の構成素となり、小説の中に『アラビアン・ナイト』のテーマを形成していくのである。さらに、小説最終部にやがて移されることになる啓示的考察を含んだ「小さな鈴の音」の挿話のように、失われた時/見出された時という物語の「シンメトリーと円環性」が萌す前の段階を垣間見せる加筆もある。

黒インクによる第2の加筆群(1911年夏頃~1912年夏)では、部分的な回想の「コンブレーI」と全的な甦りである「コンブレーII」とが明確に分化していく。1911年夏前には、小説冒頭文に重要な変化が現れる。母と会話する「朝」の思い出を書き留めようとしていた「私」が、自らの人生譚を経て「ゲルマント大公妃邸マチネ」に臨もうとする「私」に変貌しているのである。カイエ68(もう一冊のカイエ・ゲラン)のメモは、小説の終わり方の検討と冒頭部のモニタージュとの連動を証している。また、青鉛筆で記された第3の加筆群は1913年2月から6月までのものであることが確認される。

論考第2部では、「コンブレー」世界の展開が、タイプ原稿と関連カイエの総合的な照合作業を通して跡づけられていく。主要な挿話や人物、主題の生成が各章において豊かに解明されるのである。

「日曜の午後」の食卓を賑わすために、フランソワーズが司る聖所の如き「下台所」で執り行われている命を屠る儀式と、コンブレーの教会に伝わるゲルマント夫人の先祖の殺戮行為を結び合わせながら、「残酷さ」のテーマがいかに形成されていったか、ラスキンやアナトール・フランスの影を宿したバルゴット

の「読書」の断章群において、愛のテーマと芸術のテーマがどのように結びついて、書物の喚起する夢想の風景を憧れの女たちの背景に変えていったのか、ブルースト小説の地下水脈を探りあてていく論の運びは実に魅力的である。「スワン家の庭」に姿を現すジルベルトの名の「中世的な響き」とゴシック風の庭園の趣が共鳴し、少女の面影を映すさんざしの花には宗教性と音楽性が漂う。登場人物の増殖と関係化が進んで、「愛」のテーマは重層化し、先触れあるいは原型が多極化されて、それぞれの系譜が交叉しながら変奏されていく。そこにはさらに「遺伝」のモチーフも絡まって、サディズムと官能の欲望に導かれた冒瀆・同性愛・悪徳が、世代を遡って家族の苦悩と死を誘発することになる。「モンジュヴァンとルーサンヴィル」の章はその過程を検証したものであり、「ゲルマント夫人登場」の章では、ふたりのヒロインとの出会いの場面にそれぞれ割り当てられていた要素が交換・再分配され、ジルベルトとゲルマント夫人に体现される物語の「ふたつの方」が個性化=差異化していく動きをたどることができる。

第2部最終章は、小説の結末構想の重大な変容を描きだす。サント＝ブーヴをめぐる母との会話と評論によって終結するかたちの小説構想が1910年前半にはまだ生きていた可能性も見えてくる。美学的考察が当時の「最終部」すなわち「第5部」ではなく「第4部」に置かれることが決断され、小説の大団円となるゲルマント大公妃邸「仮装舞踏会 Bal de têtes」が誕生して（1910年春～夏）、1910年末から1911年初めに書かれた『見出された時』のカイエ58と57において新たなプランが実現されることになったときに、ブルースト小説は、1908年秋に着手された『サント＝ブーヴに逆らって』の構想から真の意味で解き放たれたのである。

結びの構想の変化に呼応した小説の冒頭部の新たなモンタージュ、1910年春から夏に充実していく「ゲルマント」系のカイエ群が「コンブレー」および『見出された時』との間に織り上げていく物語の伏線の増殖——そうした創造的地殻変動は、作家の妻まじいまでの読み直し/書き直しの作業に裏打ちされたものである。「閉じた世界」であった「コンブレー」が1909年秋以降「発展」していくなかで、物語全体の構造化が促され、翻ってそれが小説冒頭部の成熟と限局（探求の物語の起点でしかないという位置づけの確認）をもたらすという生成のダイナミズムに、和田論考は私たちを立ち会わせてくれるのだ。

著作の「結論」に示された1909年秋～1911年夏のカイエの分類と年代決定の見取図は、小説の物語的展開と執筆作業というふたつのクロノロジーの交差を一望させるものである。それが、作家の伝記的事実にまつわるさまざまなレフェランсыや、原稿のマテリアルな要素（タイプ印字体、紙質、インクの色など——これは1980年代後半、マイクロフィルムでしかプルースト資料の閲覧が許されなくなった時代にBNに通った世代には羨ましい指標である）を駆使した堅固な検証によって究明されたものであることを振り返ってみると、この著作とはまさしく、物理的な「書物」のありようと作者の生の時間が注ぎ込まれた「作品」の理解を、「テキスト」としての読みにいかに繋げるかという壮大な実験でもあったことが分かる。ここに示唆されているものこそは、生成研究が賭けてきた、そして私たちが今後も向き合い続けていくであろう文学研究の可能性なのである。

*

生成研究は「テキストの快樂」を極力抑えた禁欲的な方法と思われがちであるが、研究者が対象を定めるとき、その選択は科学的な判断によるだけではなく、ある種の慎ましやかな偏愛に支えられているのではないかと、実は密かに考えることがある。和田章男氏の今日に至るまでの多彩な研究・探索が、プルースト小説の至る所さまざまな相に鮮やかに切り込むものであることは疑いようもないのだが、原点となる学位論文に繋がったこの著作はやはり、ひとつの必然の賜物ではないかと私には思えるのだ。その必然をもたらしたものとは、あまりにも端正なこの論考のうちに静かに響いている「コンプレー」の物語への著者の深い愛である。

註

- 1) Akio WADA, *La Création romanesque de Proust : la genèse de «Combray»*, Paris: Honoré Champion, coll. «Recherches Proustiennes», 2012.
- 2) *Bulletin d'informations proustiennes*, Paris: Presses de l'École normale supérieure, 1975 →.